

《書評》

『移動時代のツーリズム：動きゆく観光学』

神田孝治\*・遠藤英樹\*\*・高岡文章\*\*\*・鈴木涼太郎\*\*\*\*・松本健太郎\*\*\*\*\*編、  
ナカニシヤ出版、2023 年

住 吉 康 大†

本書は、編者の一人である神田孝治氏が代表者を務める二つの研究プロジェクトの成果を含む様々な論考を、「ツーリズム・モビリティーズ (tourism mobilities)」というキーワードのもとに取りまとめ、観光研究の振興を図る書籍である。日本の観光学や観光関連研究をリードしてきた編著者陣に加え、気鋭の若手研究者も数多く迎えた 28 名による 20 の章とコラムから構成され、質量ともに充実した 1 冊となっている。

そもそも、「ツーリズム・モビリティーズ」とは何か。ツーリズム（≡観光）は一般に移動と切り離し得ない行動であり、「移動性」などと訳されることもあるモビリティという単語との組み合わせは、一見すると重複であるようにも感じる。しかし、社会科学全体に影響を与えてきた、移動に注目して社会を捉え直そうという「移動論的転回」との密接な関わりの中で、観光は単に楽しみのための人の移動という意味を超え、重要な領野として盛んに研究されるようになっていく。ツーリズム・モビリティーズは、これら一連の潮流を牽引した研究者でもあるジョン・アーリとミミ・シェラーが 2004 年に著した書籍の名を冠した概念であり、注目を集めた。本書中でも引用されている箇所を改めて示したい。

『ツーリズム・モビリティーズ』について我々が言及するのは、明白なこと（観光が移動の一形態であること）を単に述べるためではない。たくさんの多様な移動が、観光を特徴づけていること、観光がなされる場所を形づくっていること、そして観光地を創ったり壊したりしていることに焦点を当てるためなのである。(1 頁)

ある者が観光に出かける過程を想像してみると、理解が深まる。テレビ・雑誌や広告で得た情報や、実際に旅をした人の記憶に基づく語りから、観光への欲求を抱く。口コミやガイドブックを参

---

\* 立命館大学文学部教授

\*\* 立命館大学文学部教授

\*\*\* 立教大学観光学部教授

\*\*\*\* 獨協大学外国語学部教授

\*\*\*\*\* 獨協大学外国語学部教授

† 東京大学大学院総合文化研究科助教

sumiyoshi@humgeo.c.u-tokyo.ac.jp

考に計画を立て、遠く離れた地の宿や食事処の予約を取る。衣服や身の回りのもの、時には大切なグッズを持って家を出ると、様々なサービスを活用していても容易く交通機関を乗り継ぐ。現地に到着したら様々な体験に料金を支払い、ご当地のものを食し、写真を撮り、クラウドやSNSにアップロードする。帰るときにはお土産を見繕い、思い出話とともに家族・職場・友人などへと配る。ここに挙げただけでも多種多様な移動が発生し、それぞれを支える多くのシステムや人々が存在している。そして、そのような観光客を増やすために、あるいは受け止めるために、空間や仕組みが連鎖的に改変され、また次の一人を観光へと誘っているのである。

本書では、神田氏が上記の引用を踏まえながら、「アーリらが検討した移動時代における観光のあり方を考察するもの」（5頁）であると意義付ける。ここで言う「移動時代における観光」とは、先に述べたような人間と非人間、情報やモノといったものの複雑に絡み合う移動が、観光という現象のもとで空間や社会と相互に影響を及ぼし合っている状況を指している。また、編者の一人でもあり、2017年に書籍『ツーリズム・モビリティーズ：観光と移動の社会理論』を発表している遠藤英樹氏は、「観光は社会のあり方や文化のあり方を深部から大きく揺るがせる社会現象となっているのである」（遠藤, 2022: 9頁）と述べた。そして、ツーリズム・モビリティーズとは「そのことを明示し、社会のあり方を根底から問う概念なのだといえよう」と総括している。

さらに、本書の特徴は、ただ淡々とこれらの移動を紐解いていくのではなく、それを研究する観光学自体における考察の在り方も、社会の状況や研究対象の変化に応じて常に「動きゆく」ものとして捉えている点にある。「各執筆者がそれぞれの観光研究の新しい展開を志向した結果」（8頁）、多様な観光研究の視座と成果の見本市的な性質を有しており、独自の価値を発揮している。

一方で、構成や各章の題目は極めてオーソドックスである。第一部は、「キーポイントから読み解く移動時代のツーリズム」と題し、神田氏自身が「日本の観光学に関する書籍でしばしば取り上げられる視座」（6頁）と評する事項が並ぶ。また、「移動時代におけるツーリズムの諸相」と題した第11章からの第二部も、「よく検討されるもの」（同）であると評している。それでも、「移動」を軸にこれらを再検討することで、「さらなる理解」を目指しているという。各章の題目と取り上げられた事例、そして観光研究のいくつかの教科書的な書籍における言及を下のように整理してみた。

章	題目	対象または事例	他の書籍での言及
1	まなざし	アニメ聖地、インスタ映え	現 p.70 / 社 V-5
2	テクノロジー	ポケモン GO	コ IX 1-7
3	コンテンツ	キャラクター	コ V-2
4	パフォーマンス	2.5 次元舞台	現 p.111 / コ II-18
5	真正性	観光のための移動	現 77 / 社 V-6
6	記憶	日本の炭鉱	なし
7	ジェンダー	マサイの戦士	コ III-7 / 社 VI-4
8	エスニシティ	パパ・プラナカン	コ III-9 / 社 VI-11
9	ホスピタリティ	イスラームの歓待	現 p.210 / コ V-12 / 社 IX-11
10	リテラシー	観光と教育	なし
11	ガイドブック	『d design travel』シリーズ	社 IX-4
12	おみやげ	マトリョーシカ	コ V-13 / 社 IX-5
13	乗り物	「水曜どうでしょう」	なし
14	都市	シカゴ、ロサンゼルス	コ IV-4
15	テーマパーク	ドラクエウォーク	社 VIII-6
16	まちづくり	由布院、B 級グルメ、聖地	コ VI-6 / 社 VI-10
17	アート	地域芸術祭	コ X-6
18	宗教	四国遍路、ムスリムなど	現 p.172 / 社 VI-6
19	ダークネス	ムラビ山噴火災害	なし
20	リスク	COVID-19	コ XI-3

現＝遠藤・橋本・神田編著（2019） コ＝須藤・遠藤・高岡・松本編著（2022）  
社＝安村・堀野・遠藤・寺岡編著（2011）

こうして見ると、国内に留まらず海外の事例も豊富に盛り込まれ、読者の身近に感じられる具体例が多数登場していることで、関心を喚起する構成となっていることが確認できる。コラムまで含めるとさらに幅広いトピックが提供されており、内容を一つも知らない、あるいはどの事例にも興味を持たないという可能性は極めて低い。さらに、1章あたりの紙幅はコンパクトに抑えられているながら、抽象度の高い理論的な内容にまで踏み込んだ考察がなされている。それぞれの事例には多様な論点が内包されており、解釈の余白が大きく、相互の関係性も深いため、読み進めていくうちに、各事例を別のキーワードからも読み解きたくするような知的好奇心をそそられた。

ただし、観光研究を志して日が浅い学生が手を伸ばすにはややハードルが高い部分もある。評者も駆け出しの教員として、観光をテーマに設定し、初年次教育の一環であるゼミ形式の授業を担当するに当たり、本書を教科書に活用することも検討した。しかし、第一部の各章で題目として並ぶキーワードは、それぞれを理解すること自体に一定の知識と経験を要する。各著者が導入部分で概要を説明したうえで議論を展開しているものの、モビリティーズという概念自体も難解な中、一足飛びに両者を組み合わせて考えることは容易ではない。事例が豊富かつ身近で興味深いからこそ、逆説的に、ともすると読み物として楽しむに終始してしまうリスクも感じられた。

とはいえ、先の表で示した通り、多くの題目が他の書籍と共通しており、完全に一致していなくても、同様の事例を扱っている記述も見られる。それらと組み合わせることにより、本書からさらなる学びを得られると考えられる。基礎的な理解を固めたうえで読めば、親しみやすい事例に秘められた奥行きや応用可能性、既存の考え方や枠組みを固定的に捉えないことの重要性を学ぶステップとなる。また、読者自身の関心対象が定まっている場合には、アプローチや視座の選択肢を増や

してくれる。

一方、神田氏は、「あとがき」にて、「多くの執筆者からなる原稿には、アーリらが Tourism Mobilities として提起した考え方とは距離があるものも含まれていた」（213 頁）ために、タイトルを「移動時代のツーリズム」に変更してまとめたと振り返る。それでも、「思考の枠組みを固定的なものとして捉え、そこで線を引くことは、移動に注目した観点からすると疑問がある」とし、むしろ「動的な観光学の姿を示すことができるのであれば、より本書が意義深いものになる」（同）と主張する。もし、観光に含まれる様々な移動に注目し、一つ一つ詳らかにすることだけがツーリズム・モビリティーズの考え方であるならば、それぞれの章やコラムは十分にその任を果たしているように見える。しかし、あえて神田氏は「距離」の存在を指摘した。具体的に何を指しているのか明らかにされてはいないため、闇雲な推察は避けるが、この「距離」にこそ、モビリティーズを扱う難しさと醍醐味が表れているのではないだろうか。

豊富な内容を包摂し、ツーリズム・モビリティーズの枠組みそれ自体が動くことを許容しつつも、疑問を投げかけ続ける姿勢に触れ、モビリティーズ研究を担ってきた研究者の一人であるピーター・エイディによる論考のタイトルを思い起こした。If Mobility is Everything Then it is Nothing (Adey, 2006)。モビリティが全てであるなら、それは何ものでもない——。本書だけでなく、近年日本においても「モビリティ」や「モビリティーズ」を主題に掲げ、様々な事例を通して移動の重要性や社会との相互作用を描出する書籍が相次いで登場している。確かに、現代社会において移動は無視できない重要な要素である。住所制度のように、身近な部分では今でも固定的であることが前提とされている社会に身を置いている分、移動論的転回は考え方の根底を揺るがし、新たな視座をもたらしてくれる。しかし、モビリティーズという概念を用いただけで、何かを語ったような、理解したような感覚に陥るのは危険である。エイディが指摘するように、モビリティーズにはイモビリティーズ（immobilities = 不動性）が常に伴い、両者は緊密に結びついている。また一口に移動と言っても、スピードやリズムといった様々な要素が異なり、一様ではない。幅広く適用可能な概念であるからこそ、何が、なぜ、どのように動いているのか、慎重に読み解いていく必要がある。

本書でも一部の章やコラムの中にそれらを考えさせるヒントが散りばめられていたが、全体としての導入や総括で明確に踏み込んだ言及は少なかった。若干の物足りなさも感じるが、本書はあくまでモビリティーズをヒントとすることで観光に対する新たな考え方の扉を開き、面白さに気づく機会を提供する存在だ。それ自体が強みであり、既存の文献には担えない貴重な役割でもある。28 名が思いを込めて描き出した観光の諸相が放つ鮮烈なメッセージを受け取ったうえで、モビリティーズを魔法の呪文にさせることなく、さらに観光を探究していくためにはどうすればよいか。私たち読者一人一人も自ら「動き」ながら、考え続けなければならない。

## 参考文献

- 遠藤英樹・橋本和也・神田孝治編著（2019）『現代観光学：ツーリズムから「いま」が見える』新曜社。  
遠藤英樹（2022）「ツーリズム・モビリティ」須藤廣・遠藤英樹・高岡文章・松本健太郎編著『よくわかる観光コミュニケーション論』ミネルヴァ書房、6-9 頁。  
須藤廣・遠藤英樹・高岡文章・松本健太郎編著（2022）『よくわかる観光コミュニケーション論』ミネルヴァ書房。  
安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟編著（2011）『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房。

Adey, Peter. 2006. If Mobility is Everything Then it is Nothing: Towards a Relational Politics of (Im)mobilities. *Mobilities*, 1(1), 75-94.